許すなトマホーク ①

高精度の万能兵器

6月から米太平洋軍に配備

今年の六月から、アメリカ太平洋軍（司令部はハワイ）に、巡航核ミサイル「トマホーク」が配備されようとしている。

このトマホークは、どんな核ミサイルか、そのプロフィルをみてみよう。

昔、『鉄腕アトム』という漫画があった。アトムは山を迂回し、丘を越え、谷にそってとぶロボットだった。トマホークも、人工脳をもち、自分で地形を読みとり、山を迂回し丘を越え、目標を探し、そして命中する。アトムに似た精密誘導兵器（PGM）なのだ。そのかたちは、ちょっとスリムな超小型無人ジェット機といったところだろう。だが、この鉄腕アトムならぬトマホークは、海面上なら二〇メートル、丘陵地帯なら五〇メートル、山岳地帯では一〇〇メートル、目標附近ではなんと二〇メートル以下の超低空を飛行する、という。低くとぶのは、レーダーにつかまえられないためだ。しかも小型でレーダーに映りにくいうえ、レーダー波を吸収してしまう塗料もぬられている。まさに〝穏密兵器〟といったところだろう。

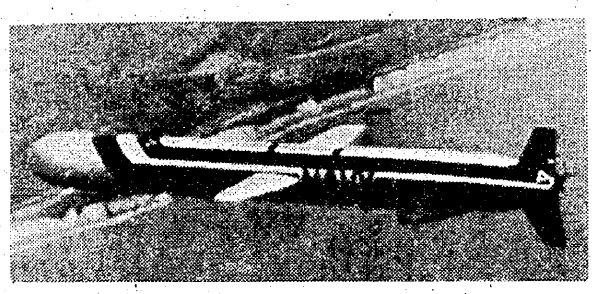
相手にとってみれば、気がついたときにはもうそこまできていて、何の手も打てない、といったことになる。

ところでこのトマホークは、一基わずか二億四千万円程度と、びっくりするほど安い。

だから大量に配置できる。しかも、小型だから簡単に船や飛行機で持ちはこびができ、どこからでも簡単に発射できるのだ。こうして、トマホークは、万能兵器とみなされるようになった。いままでのミサイルだと弾道がわかってしまうので、迎撃されてしまうかもしれないが、これなら大丈夫、という訳である。

こんな核ミサイルが配備されたら、ソ連だってたまらないだろう。だから、大きくいって二つの対抗措置をとるといっている。一つは、人間が判断する余裕がないのでSS—二〇などの発射の引金をコンピュータにゆだねるということだ。トマホークらしいなにかが侵入してきたら「自動的」に報復ミサイルを発射するぞ、というのだ。いま一つは、同じような性能の巡航ミサイルを開発・配備するということだ。

そうなれば、アメリカだって核ミサイルの引金をコンピュータにゆだねることになるだろう。こうして、トマホークの配備は、コンピュータに人類の運命をまかせるといった、本当に非常に危険な核戦略の幕を開けてしまうことになるのだ。



三池炭鉱の歴史の中から

智恩社の教義

その三 第六回

十六分会 武松 輝男

もともと智恩社というのが、近郊村落民や坑夫たちを対象としていたから、弥陀初会（みだしょえ）や選択本願（せんじゃくほんがん）を信じさせるためには、お経よりも和讃の方が、物語り風で理解しやすいからであったろうと考えられる。

ところで、智恩社といえども教義そのものは、他の宗派や寺院と異なるといったものではなかった。ただ智恩社が、他の宗派と同派寺院と異なっていたのは、経典や和讃のほかに、三池炭鉱の生産拡大と発展に直接的な効果を期待するという、そういう他の宗派や同派寺院にないものを教義の中に加味させたところにその特徴があった。

「坊さんがちょいちょいきましてですナ、そこで坊さんが話していましたのは、何かむずかしい説教とですナ、だまって働けということだけでしたバイ」

老坑夫たちは、ほとんど異句同音にそう語る。

しかしだからといって、ただ和讃とだまって働けだけでは、生と死のはざまで、ギリギリの生活をつづけている坑夫たちをゆり動かすことはできまい。

そこで用いられたのが、三世の因果と輪廻の思想をもりこんだ「現世利益和讃」であったらしい。

三世の重障（じょうしょう）
みながら
南無阿弥陀仏（なむあみだぶつ）
をとなうれば
流転輪廻のつみきえて
南無阿弥陀仏をとなふれば
諸天善神ことごとく
かならず転じて軽微なり
この世の利益きはもなし

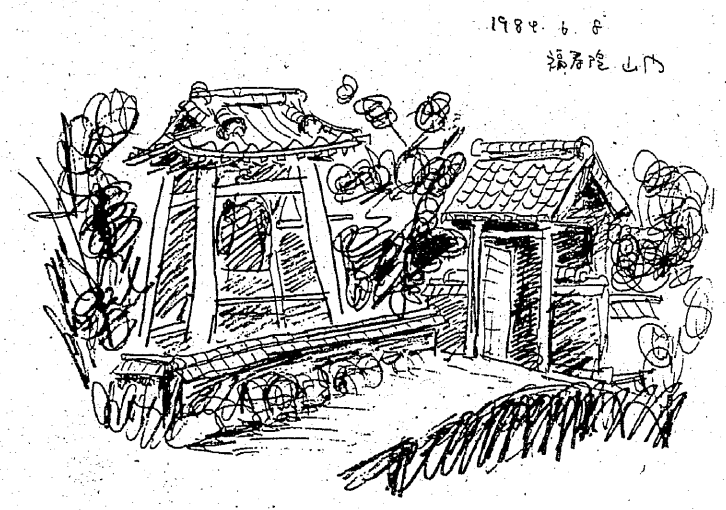
現世利益というのは、善いことをすれば天上に昇り、悪いことをすれば地獄へ堕ちる、このことがこの世では繰り返しされて、天上、人間、修羅、畜生、餓鬼という五つの段階をいったりきたりするというのである。

「前世で悪いことをしているから、囚徒坑夫は修羅の生活をしなければならない。お前達も同じことで、会社にタテつき、仕事をしないなどといった、世のためにならないことをすれば、次の世では修羅や畜生に生まれ変わる。もし、生まれ変わることがないといってお前達がやった悪いことの報いを子供達が次の世で背負うことになる」

智恩社の説教というのが他宗派と違うところがわかってもらえるだろう。説教の軸に三池炭鉱社を置いて、それに従うことを善、反対することを悪というのである。別の言い方をすれば、宗教の名を借りた宣撫と恫喝とでもいえるだろう。それに経済的制裁が加わったら、いったいどういう効果を生み出していくのだろうか。

「天井がミシミシいよるケン危なかテ。お前は仕事バすうごつなかケン言うとじゃろ」という威圧が幅をきかすようになるのである。

（カットも筆者）



松島義孝さんが逝去

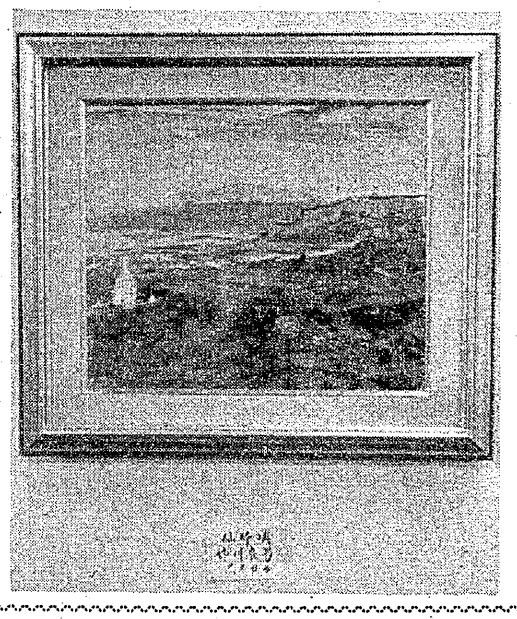
松島義孝さん（七分会・荒尾市妙見社宅八十六棟・五十三歳）は五月二十五日から荒尾市民病院に入院加療中でしたが、病状が悪化して六月十一日午前二時ごろ肝硬変症のため逝去されました。心から哀悼の意を表します。なお、遺族は奥さんのみどりさんと長男、二男がおられます。

有明地域総合美術展に姉川さんが出展

昨年に続いて第二回の有明地域総合美術展が六月七日から十二日まで井筒屋ギャラリー（洋画・日本画のみ。書道・写真・染織・陶芸などは松屋別館で）で開かれました。

この美術展に、姉川良男さん（十八分会・港務）が八号の油絵『仙酔峡』を出展しました。

姉川さんは大牟田美術展の審査員をつとめており、近く個展を開くために、製作に励んでいます。（写真は姉川さんの作品カラーでないのが残念です）



北炭はいま… ①

〝これから…〟に雄々しく立ち向う

幌内支部

昭和五十年の大災害から足かけ十年、幌内は依然としてその〝後遺症〟、つまりその時の莫大な〝借金〟に加え、分社時やこれまでの出炭減をはじめ生産諸元の低下がこれに拍車をかけ〝瀕死の重症〟にあるのは、今もって変わらない。

働く者が一昨年、昨年と賃金アップゼロ、期末手当も長い間にわたって低劣な金額で抑えられ、最低の労働条件下でまさに〝ヅメに火を点す〟耐乏生活。

しかし、これもひたすらヤマの再建に一縷の希望をもっているからに他ならない。

一方、もってゆき場のない憤り。これだけ努力し苦労しても報われないことへの苛らだち。千五百余人の組合員のハラの中は煮えくり返っているに違いない。

三月二十八日、幌内にとっては、これが最々後の支援措置が関係筋によって認められた。

土俵にはもうアトがない。

再建計画に盛られた保安確保を前提に出炭や掘進計画、災害率の減少、出稼率の向上などなど、これらの諸元をなし遂げるほかに生き延びる道はない。

幌内の組合員、家族には、もう一歩も後ずさりは許されない。

前へ前へ進め！ それだけを胆に銘じて、まなじりを決し、〝これから〟に雄々しく立ちむかおうとしている。

下田委員長を始めとして指導部の人たちの苦悩は深い。

だが、五十八年下期あたりから、やっと石炭が出始めた。

ピカピカに光った〝幌内炭〟だ。（よし、その意気だ！）

静かだが、確実に夜は明けようとしているのだ。

（『北炭労連』五月一日号から）

ボタ山を背景にした幌内炭鉱のヤグラ